慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	景気論に関する近刊書三
Sub Title	
Author	小高, 泰雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1931
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.25, No.1 (1931. 1) ,p.118- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊批評
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19310101-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊批評

景氣論に關する近刊書三

小高泰雄

M. Bouniatian: les Crises Economques. Essay de morphologie et théorie des Crises Economiques periodics. (2e Ed. 1929)

本書第一版は一九一五年露西亞語を以て、モスコウに於て出版せられ、一九二二年 J. Bernard 氏の手に佛譯せられ巴里より出版せられた。本書は同佛譯版の二版であつて、原版と對比して見るに多少加筆せられてゐる所があるからして、其の部分を紹介したいと思ふ。

ブ氏に據れば「經濟恐慌の本質は、一面に於て、生産及び分配過程上に生じたる矛盾の急激なる、併し、不可避なる解消の中に、他面、此の激變の齎らせる經濟生活の基礎の破壞の中に存してゐる」(p. 140.) ものであつて、然も、それは常に物價の急激なる下落と一致してゐる。(168-169) 然るに資本主義社會に於ては、生産は常に値價作出の原則の上に行はれ、(p. 150) 價格は經濟活動の調節者となるものであるからして (p. 152)「財貨の價値の激變は經濟恐慌の基礎である」(p. 170) と結論してゐる。從て、恐慌の周期性の原因は、物價の周期的變動の原因を探究する事に據つて闡明し得るものである。(p. 170)

本書即ち第二版に於て加筆せられた、主要なる個處は、物價の變動は、交換方式中に於ける能動的要素であつて、決して受動的要素ではない事を强調してゐる點に存する。ブ氏は「客觀的交換價値の基礎をなしてゐるものは、絶對的社會値價であつて、」(p. 181)「絶對的社會價値は絶對的主觀價値が最終主觀効用に據つて決定せられる如く、夫は、最終社會効用に據つて決定されてゐる。」(p. 181) 故に彼の立場は明に主觀的値價論である。然して、「經濟財の社會價値の變動の要素は：：：一定された全體としての經濟人の欲望を完全なる且、持續的方法を以て滿足するが爲めに不可缺なる斯く斯く財の一定分量の需要と、此の分量の有効的存在(換言すれば、實際に獲得し得る)である」(p. 206) 而して、「財貨の分量の變動或は、需要の移動より生ずる個々の財貨の格價は物價の全體的運動を惹起せしめ、物價の先行的變動の意味に於て、財貨全體の貨幣價値の變動を生ずるものである。」(p. 247) 如斯き立場が景氣論上の金融說或は其の基礎をなす貨幣數量說より非難せらるべきは當然である。

近來の金融偏重の議論を以て、ブ氏は、彼の通貨主義 (Currency school) の復活なりとし、夫が後者と異る所は、一層限定せられたる特性を有する流通手段たる小切手が銀行券に換置せられたる點にあるも、夫は舊來の說と同樣精確なる事實の上に立脚せるものではない。此の派の如何なる論者と雖も信用循環上の回轉期が産業循環上のそれと一致してゐる事を以て、直ちに、之が、「直接の證明」であるとか或は前者が後者を決定する何等かの可能性あるものとする事は出來ないと述べて

ゐる。(p. 193) 又、彼等が謂ふ樣に、「信用の創設」が物價の騰貴從て好景氣を招來する決定原因とするならば、獨逸、佛蘭西の如き、彼等が認めて以て、信用制度の幼稚なりとする他方に於ても、既に、周期的經濟恐慌を免れ得ないのは何故であるか。(p. 194) 彼等は宛も信用の增減が銀行の自由意志に依つて決定せられる如く說くけれ共、夫は全然誤謬である。「信用の需要は、事業家より當然來るものであつて、信用を享けんとする彼等の欲求は、景氣が順調なれば、順調なるに從つて大となるものである。」(p. 194) 「物價の騰貴、事業量の增大が第一次的現象となり、信用の膨脹は其の後に來るものである。」(ditto)

彼等は又、貨幣數量說に基付て、信用の變動に倚つて物價の變動することを主張せんとし、(一)物價の一般的騰貴は、貨幣價値の下落の結果としてより外には考え得られない、(二)信用の增加は貨幣價値を低落せしめ、從て、物價を引上げ、信用の制限は、貨幣價値を上騰せしめて、物價を引下げると說く。

先第二の點より見るに、「或る與えられたる條件のもとに於て、信用の膨脹は貨幣價値の下落を決して伴ふものではない。否信用の膨脹は、交換の增加の結果たる貨幣の價値の騰貴を緩和するものである。不景氣の際は之と反對である。」(p. 196) 第一の點に就てブ氏は、其の議論は財貨價値の可變的性質を誤認し、財貨流通の手段たる貨幣其の他の手段の流通速度を其の正當なる限度に於て、考察してゐないものであるとなす「物價は貨幣の分量と、他の財貨の分量との關係を其の財貨及び貨幣の絕對的價値の關係を基礎としてのみ、之を代表すとしてゐるものである。財貨の價値は其の分量の變化と反對の意味を以て割合を同しくして變動するものではなくして、……假例、財貨一割の減少は、價値に於て二割と謂ふ如き上騰を考え得る……同樣に、より多數の財を犧牲として少數財の上に需要の集中する場合には、財貨全體の絕對價値の上騰する事はあり得る。」「故に、全體としての財貨の絕對價値は獨立的に變動するものであつて、其の變動が物價に表はれるのは、……貨幣の絕對價値の同時的騰貴を阻止する如き貨幣的流通手段の流通速度の變動を生ずるが爲めである。……物價騰貴の際に流通速度の增加するは、直ちに、移して、以て、其の證明とする事が出來る。故に物價は、交換方式中の受動的要素ではなくして、反對に能働的要素である。」(p. 198-199)

S. Kuzunits: Secular Movements in Production and Prices Their Nature and Bearing upon Cyclical Fluctuations (1930)

本書は其の表題に於て明なる如く、生產及物價の傾向的運動の研究である。經濟生活の變動の傾向が如何なる態樣を採るものであるか、其の理論的根據は如何なるものであるかに就ては、靜態理論が從來學田に仲やかなる成長を示したるに對して、稍、繼子扱ひされたる嫌はあつたが既に其の重要なる所以は指摘せられ殊に社會主義經濟學の側よりして、華々しい發展が示されてゐる所である。本書は實證的統計的方法を以て、英米獨佛其の他諸國の生產物價數字を縱橫に使驅して、過去約五十年に於ける第一次長期的傾向 (the primary secular Trend) 第二次長期的傾向 (the Secondary secular trend) 循環的變動 (cyclical fluctuation) を設定し、其の間の關係を決定してゐるのであつて、所謂動態經濟論の基礎的研究である。

第一章より三章迄は、產業の平均發達の中に顯るる發展率の漸次的減少の證明であつて、對數線

或はゴンベルズ曲線を材料に充當してゐる。減少の理由としては(一)技術的進歩の萎縮、(二)發達遲き産業の發達早き代替産業に對する制動的影響及び、後者の同樣なる影響の競爭産業に與へらるる事、(三)發展に充當せられる資金の增加率は、産業規模の增加に比して減少する事、(四)後進國よりの競爭に之を需めてゐる。第四章は、第二次長期的變動を取扱つたもつである。此の變動の存在する事に關しては、既にジェブオンス、カッセル、シュピイトフ等の不完全乍ら指摘した所であつて、著者は先、第一次的傾向の周圍に現はるる偏倚を通して、移動平均法を用ひて、循環的變動以上に長期に亙る變動を以て、之を現はしてゐる。而して、生産指數と、物價指數とを比較したる結果、前者は、大體の場合後れを示してゐる事を明にし、進んで、前者の變動は後者の變動に倚り大ひに影響せられるも、他面、戰爭、大發明、發見、時に有力なるトラスト政策等の結果生ずるものなりとする。第四章第五章は、第一次第二次長期的傾向及び循環的變動の關係の研究である。第一次傾向は第二次傾向に强く、循環的變動に移動に弱く作用する。第一次線の增加率速なれば速なる程、第二次及循環的變動の振巾と大なる事を證明してゐる。此の事は、ジュグラーの所謂國富の進歩の大少は、恐慌の大少に比例する事を裏書きするものと考えられる。循環的變動は頗る錯雜なる原因を有し、第二次線向線との關係は直接的のものにあらずとなしてはゐるが、景氣及び不景氣の各別の期間に對しては、相當の影響を與ふるものなりとし、反對に、景氣變動の周期は第二次的變動の振巾に對して、重要なる影響を與ふるものなりとする。勿論之等の關係は概括的平均的事項に屬するものであつて、個々の産業に就て見れば、相當の例外ある事は免れない。

傾向線の重要なる意義を縷說したるものに、ミッチェル教授の巨作 Business Cycle, Problem and its Setting がある。書中教授は、傾向線を以て、單に景氣指數を誘導する前階段たるの狹きものに限定せず積極的に研究すべき價値ある所以を述べられてゐるが、以後幾何ならずして、本書の出でた事は、斯學研究者の共に歡びとする所である。

高島佐一郎著「信用統制と景氣變動」（昭和五年十一月一日）

堂々八百八十頁に及ぶ浩瀚なる本書は、著者が昭和三年より五年一月に至る雜誌論文を系統的に蒐合したものであつて、上編新金本位制と信用統制、中編景氣變動とその安定、下編經濟學に關する斷章、よりなる。

著書が、本書を通して讀者に訴えんとする所は、一、動態的名目主義に基礎付けられる英、米本位の連帶的運用が、その新なる精神、態樣に據りて着々發展し來るや、本邦の對內對外的經濟生活の安定を期するが爲めには、彼等と同樣なる金本位を運用するの必要漸次明白となり來つた事、二、信用調節の作用力により景氣變動を安定し、隨つて、世界の物價水準、金利平準及び、就業率の推移を平調化せんとする努力が實行圈內に來つた事、三、如斯き經濟生活調整の爲めには、歐洲に於ては、巨大なる賠償問題に絡まる難問を緩和する事を要し、本邦に於ては、經濟生活全般に亙る合理化を行ふ事を要請するものであつて、之が爲めに生する一時的犧牲に就ては勞資双方が公正に負擔すべきことの三箇の現象の全き理解を與えんとするにある。

著者は先、金屬主義に對する名目主義の勝利より筆を起し、其の靜態的理論としては、クナップに至つて、殆んと完全に、樹立せられたる事實を敍說し、クナップ以後に殘されたる課題は、其の動態的理論の發展にありとする。貨幣價値即ち一般購買力の變動は、飽く迄も貨幣數量說に立脚し

てのみ正しく理解せられるけれ共、名目主義者としての本來の立場よりして、貨幣側に存する變動は決して、金にかかわらしむるものではない事を高稱する。然らば、それの實際政策上の任務は何かと謂えば、それは、理想的貨幣造出に據つて、物價水準を安定せしめるにある。理想的貨幣造出上の原則は、貨幣造出を生産に據つて規制するにある。生産と平行しての中央銀行割引率の變動は此處に至つて、物價安定上重大な意義を有する事となる。世界的協調の許に行はるる信用統制による物價安定、換言すれば金價格の人爲的調節、ここに、回復されるる「新」金本位制は、從來自働的調節に委したる舊本位制と強き對照を示す。ホオトレイ氏一派の景氣論上の金融說を多分に受け入れらるる著者は、之に據つて、以て、景氣なる經濟生活への望みを懸けてゐる。

如斯き理論と政策とを齎すに至つた事情は何れに存するかと謂えば、それは、米國準備金制度が一九二二年以後、其の準備金の集中と、割引政策と公開市場政策の金融市場統制力の强大なるに據つて、金準備の不利用より生すべき利息損を敢て冒し、中央銀行の金利を專ら産業的需要の消長に應えて動かしたるが故に、約五年間に亘つて、物價は大體戰前の五割高に維持せられ、該國に於ける未曾有の繁榮を齎したる事、並びに英米の各中央銀行の施せる愼重なる信用統制策を通して、金流出入が通貨信用の消長に及ぼす影響を中和し、國際協調的なる金利低下竝びに、低めらたる物價に於ての安定を實現し得たる點に就ては、諸國はほぼ類同するの發展相を示す事を得た點に存する。然らは、我國の金本位制の許に於ては、貨幣の對外對內價値の安定は何を究極點として推移し、安定するかと謂ふに、夫は、國際的貨幣價値の指導力を握つてゐる市場に追隨する事である。而して、之に追隨し、充分の統制作用を行ふに就ては、預金に對する準備金比率の決定を行ふ事が肝要であるとなす。以上は第一編を通して、殆んど其の全面に流れてゐる主張であり理論である。

更に第二編に臨んで、筆者は讀者と共に大ひに聽んとする所は、物價安定が、然らは、景氣の變動産業の安定に對して如何程の重要性を有するものであるか。進んでは、物價に必然的に影響を及ぼすべき金利、信用運動が著者の景氣理論の關係中に於て、如何なる地位を有するものであるかである。

扨、景氣變動の原因は、從來屢〻一元的のものたらしめんとして、多數の學者が努力したに拘らず、多元的要素を認めざるに至り、或は、一見一元的のものであると自稱してゐるものにしても、それは結局に於て單に主導的、優勢的要素を指摘したるに止つて、其の理論的歸結は、多元的のものたる事は、彼のホオトレイの金融說に對しても妥當せらるべき事である。著者も亦多元論即ち非貨幣的要素を主とし、貨幣的要素を以て激成的條件的要素なりとの立場を執つてゐる。內容に於てはともあれ、理論形成上よりすれば、ヒグー教授と同樣である。從て、信用統制とか物價安定が景氣變動に作用し、之を緩和する程度は、ピ教授の謂ふ「それは貨幣信用側の作用より發出せる景氣變動のその部分だけを除去し得るに止まる。此の故に又その除去せられたる場合の産業變動の强さは、殆んど、無統制なる現在に於て、それがある所の半ばは輕減されるであらうが。然し尙ほ重大なる變動の芽は摘まれずに殘つて居る」事をその儘承認せられてゐる。從て其の景氣政策上の主張は「企業者側よりしては、常に能ふ限り市場豫測を精密に行ひ、凡そ正業操業を營み得らるる如くに、諸般の設備規模を鹽梅し、更らに市場の情勢に伴ふて、施行せらるべき、生産數量の統制力を强からしめ、重工業及び大規模工業にありては、殊に其の流動資本に對する固定資本の割合を過大ならしめないのみならず、時に應がうて、新機械新設備を採擇し得らるる如くに、固定資本に對する原價償却率を高からしめ、又之に低價起らば、時を移さず、資本評を低價して、持續的なる整理を營み、絕えず、市況に顧みて、其の在るがままの資産負債狀態をもつて、適正强度的の經營を行

ふべきである。」之が爲めに又「產業部分の性質にして許す限り企業の聯合協同及び合同を敢行し進むべきである。ついで國家又は金融業者側より施さるべきものとしては、其の廣汎精到なる調査を通し經濟生活の推移を洞察するによりて國民經濟的に合目的なるべき資本充當の方向を暗示するに止まらず、更に物價の推移變動に善處すべき公開市場政策並びに割引政策を營み、以て景氣變動を平調化して、經濟生活の發展を順調に往かしむべきである。」（三七〇―三七一頁）

次に、著者は、一九二〇年前後より純粹貨幣現象的景氣循環論の漸次に勢力を增加し、「財貨測重視觀の修訂を强ふるものが存在した如くである。」（四三二頁）となし、其の原因を以て、「金本位制が世界的となれると同擴的に、景氣循環の情勢亦國際となつたる其の趨向に於て兩者間の相關關係を想定し、進みて因果關係を定立したもの」であるとなす。而して、此の說の代表者を、當然に、ホオトレイに見出し、其の所論を敍說し、批判してゐる。著者は、之を以て、（イ）理論、政策とも に餘りに英米的である。（ロ）餘りに銀行信用重視に過ぎる。（ハ）餘りに金利の有する統制的機能を偏重する。（ニ）餘りに貨幣數量說一點張りに過ぎる、（ホ）米國に現存する程の有力なる信用統制機構及び統制實力なくしては、其の支持する政策の實行を期し難いと評してゐる。

次にホオトレイに對するピグーの論爭に關する一章も亦興味あるものである。ピグーの理論に對してホオトレイのなしたる系統的批評 Pigou's Industrial Fluctuation (Trade and Credit pp. 142-184) に對するピグーの應酬 The Monetary Theory on the Trade Cycle. (Economic Journal, June, 1929 number pp. 183-194) が紹介されてゐる。著者は此の舊くして旺んなる論爭に對して、何れにも軍配を擧げずに「原因の實相は之等の綜合のうちにのみ伏存するものである」となす。事實又、兩者の論爭の累なるに從つて、其の觀察思索の漸く歩み寄つて來てゐる事實即ちピ教授に於ける貨幣的條件の分析の精致を加え、ホ氏の理論に貨幣以外の要素の介入するに至れる事を指摘してゐる。然し筆者の受けた印象から謂えば、著書は寧ろホ氏により多くの同情と興味とを有する如くである。

尙下編「經濟學に關する斷章は」　福田、神田、大西、ヂイド、勝田、丸谷、田中金司諸家の諸文獻を「動感的視覺より迫り批判し」以て著者の態度を間接に示されたる有益なる一編なるも此處には之を割愛する事とする。

本照介は筆者が讀後、筆者の目下最も興味を感じつつある箇處に就て印象付けられたる節を綴つたものであつて、各章各節に亘つて、景氣論の研究者が採つて以て參考とし、指導となすべき點の枚擧に暇なきものあるを附言して置く。

上編　新金本位と信用統制

第一章　名目主義貨幣論の發展と新金本位制への解釋力（商業經濟論叢　昭和四年七月）

第二章　新金本位の心と金解禁の基本的準備殊に失業對策（法律春秋　昭和四年十月）

第三章　新舊金本位の姿と預金準備の集中（東朝、昭和四年八月十一日―十七日）

第四章　新金本位運用下に於ける貨幣價値安定の理論と政策（著書「金融政策」第二編第七章改訂增補文）

第五章　一國の貨幣理論家の展示しをる貨幣價貨寸定理論（中央公論　昭和五年一月）

第六章　金統制と信用統制とに關する時論と理論（國民經濟雜誌　昭和三年四月）

第七章　過大國債の歸結としての資本課稅案又は代案の復活の意味（同上　昭和四年二月）

第八章　金解禁論上、閑却された諸問題（同上　四年七月）

中編　景氣變動とその安定

第一章　貨幣的景氣理論並びに汎歐幣貨制度論への考察（商業經濟論叢　昭和二年十二月）

第二章　景氣變動理論の梗概と信用統制策の管見（企業と社會　昭和三年二月三日）

第三章　純粹貨幣的景氣變循環理論とその吟味（國民經濟雜誌　昭和四年九月）
第四章　貨幣現象的景氣循環理論に對するビブウの論爭とその批判（同上　昭和四年八月）
第五章　生產統制と產兒統制への管見（經濟往來　昭和四年二月）
下編　經濟學に關する斷章
（以下略）

前號（第二十四卷第十三號）目次

◉蘇聯新々經濟政策以後　小泉信三
◉資本制蓄積の理論　伊藤秀一
◉經濟學に於ける經驗の方法に就て（De la experimentation en science économique positive）　ブランソア・シミアン　松本信廣譯
◉長谷川安兵衛著『新銀行會計研究』　三邊金藏
◉長谷川安兵衛著『豫算統制の研究』　山田正夫
◉三田學會雜誌第二十四卷後半總目次

●一冊定價金五拾錢（郵稅金壹錢五厘共）
●半ケ年分金貳圓九拾錢
●一ケ年分金五圓四拾錢
●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限
昭和五年三月廿一日印刷納本
昭和六年三月廿二日發行
毎月一回一日發行
三田學會雜誌
第二十五卷第一號
禁轉載
東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　編輯兼發行者　江田範保
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　印刷者　金子鐵五郎
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　印刷所　金子活版所
東京市芝區三田貳丁目壹番地　發賣元　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九二六番
●尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す
東京芝三田慶應義塾內　發行所　理財學會